

ルイーゼ・オットー＝ペータースの「シスターフッド」

——1849年ドレスデン5月蜂起をめぐる女性の連帯の過剰——

須藤 温子

ルイーゼ・オットー＝ペータース (Louise Otto-Peters) は、19世紀ドイツの第一期女性運動を築いた先駆者であり、作家である。彼女は、階級、身分といった従来の枠組みを解体し、「我々の姉妹」として労働者階級をも取りこむ女性の連帯を志向する。このような超階級的な「シスターフッド」の理念は、当時においては革新的であったといえよう。「シスターフッド」は、ナンシー・コット、ルース＝エレン・ポエチャー・ジョレスらによって、女性同士による友情基盤、「ペア (対等な立場)」、男性不在を特徴として指摘されてきた。しかしながら、オットーの小説『城と工場』(1846年)や彼女が発行した『女性新聞』のドレスデン5月蜂起時(1849年)の記事を検討してみると、そこに示される「シスターフッド」像は、従来の「シスターフッド」像を継承しつつも決定的なずれを孕んだものとして浮上する。本論は、このずれ、過剰さとは何かを問うことを目的とする。

1. ルイーゼ・オットーが目指した「シスターフッド」とはどのようなものか

ルイーゼ・オットー＝ペータース (1819-1895) は、小説家であると同時に、第一期女性運動の礎を築いた穏健派市民女性運動家として、1848年の三月革命期を経て19世紀末に至る四半世紀をザクセンを中心に活躍した人物である。彼女は、既に三月革命期に女性協会の設立を呼びかけ、1865年には「ライプツィヒ女子教育協会」や全国的な女性組織の先駆けとして「全ドイツ女性協会 (ADF)」を創設し、女性の自立した組織と自助を何にもまして擁護した。また、マイセンではドイツ最初の女性編集長として『女性新聞』を1849年から1851年にかけて発行した。

この新聞で彼女は、市民女性による女性協会設立の動向をはじめ、女性労働者の日常生活の窮状などを報告し、女性たちが階級や身分といった障壁を越えて共有すべき問題として、当時の女性問題や労働者問題を率先して取り上げた⁽¹⁾。女性の連帯、一体化、すなわち「シスターフッド」の理念によって、このような階級間の境界を取り払おうとするオットーの革新的な努力は、19世紀の女性運動の中でも特殊であり、少数派に属していたといえる (Joeres [1998:17])。

では、オットーが目指した「シスターフッド」とはどのようなものだったのだろうか。

彼女は『女性新聞』の創刊号で「わたしは自由の国に市民女性を募る！ (Dem Reich der Freiheit werb' ich Bürgerinnen!)」(FZ 1849/Nr.1.) (以下、同新聞からの引用は、本文中に (FZ 西暦/号

数)と略記する)というスローガンを掲げ、また、綱領では女性たちに対して次のように呼びかけている。

さあ、わたしの姉妹たちよ、まわりの人々がみな前へと突き進み闘うとき、とり残されることのないように、わたしと一体となりましょう。

[中略] 私たちは要求します！ 権利を、私たちの内にある、あらゆる能力を自由に発展させるという純粋な人権を、そして国家における成人としての権利、自立の権利を！

[中略] 自由と高貴な人間性を、私たちにあって手の届くあらゆる仲間内で広めていきましょう。新聞雑誌を通じてより大きな生活領域のなかで、そして教導と教育を通じてより親密な家庭のなかで。しかし私たちは、一人一人の女性自身が自分自身のためだけではなく、むしろ全女性のために、そして大抵の場合、貧困、哀れみ、無知のうちに忘れられ、なおざりにされて苦しんでいる女性たちをとりわけ心にかけることによって、私たちの要求を獲得したいのです。

[中略] 作家ではない私の姉妹たちからの、とりわけ抑圧された女性たちや、貧しい女性労働者たちからの報告をお待ちしています。[中略] —重要なのは、彼女たちの問題が公的な場に届くことなのですから。(FZ 1849/Nr.1.)

このように、創刊号から読者への呼びかけには「姉妹たち (Schwester)」という言葉が用いられ、(市民階級の)読者が「私(たち)の姉妹」として想定されているだけでなく、女性労働者たちもその対象になっていることがわかる。同様に、「女性労働者たち」(FZ 1849/Nr.11.)と

いう記事でも女性労働者たちの窮状を説明し、「私たちの貧しい同胞たる姉妹の名において、ドイツの女性たちに向けられた懇願に、女性たちが耳を閉じないことを私は強く希望します」(FZ 1849/Nr.11.)と、救済基金の設立の必要性を訴えている。この「私たちの貧しい同胞たる姉妹」という表現によっても、血縁関係にない他者、すなわち記事が報じる貧困に苦しむ女性労働者たちのことが指示されていることがわかる。

『女性新聞』から窺われるのは、オットーが、実際には市民層と労働者層の女性たちが身近にいながら越境不能で相互理解困難な、全く別様の生活環境の中で生きていることを前提としながらも、「同じ女性なのだ」と強調することで、その前提となる階級、身分、時には領邦諸国家といった従来の枠組みを解体しようとしたことである。彼女は、階級によって切り離されている女性たちを「私たちの姉妹」として想定し、超階級的な「シスターフッド」という新たな連帯の形、すなわち互助ユニットとして社会変革を起こしうる、ひとつのユートピア的な共同意識を形成しようとしたのである。

しかしながら、オットーの目指したこのシスターフッドは、超階級的な女性の連帯の理想形であるにとどまらない。実は、ある過剰さをも孕んでいるのである。では、その過剰さとは何か。

この問いに答えるために、本論文では『女性新聞』と、その発行の三年前にオットーが作家として出版した長編小説『城と工場』(1846年)を見ていくことにする。しかし、まず始めに、シスターフッドという概念について従来どのようなことが言われてきたのかを確認するために、次節では、ナンシー・コットとルース＝エレン・ジョレスのシスターフッドに関する議論

を検討することにしたい。その上で、彼女たちの議論と対比しながらオットーのシスターフッドが何を指し示しているのかを見ていこう。

2. ナンシー・コットとルース＝エレン・ジョレスの「シスターフッド」論

コットは、18世紀後半から19世紀中頃に、ニューイングランドの女性たちが女性同士の友情を理想化し、個人的な関係の中で「シスターフッド」という新しい連帯の意識をつくりあげていった、と論じている⁽²⁾ (Cott [1977:160])。

コットは、女性たちが男性優位の社会では男性よりも合理性や理性の面で劣る存在として従属的に位置づけられるために、同等の価値観や細やかな感情の共有を、男性に対してよりもむしろ同性である女性の友人に対して見いだしていくと指摘する。

女性同士の友情には、軽蔑や従属を必要とせず、平等、「ペア (対等な立場)」(Cott) という価値が持ち込まれるために、女性の友人は、女性たちの生活の中で新しい価値を持つようになる。また、友情は女性にとって血縁の絆から解放され、純粋に選択的な関係態で存在するものとして、理想化の対象になっていく。19世紀の家父長的な社会および家庭において、男女間で期待されるべき従来の基準は、ヒエラルキー的な関係であった。つまり、女性は男性の「ペア」の対象ではなく、男性に依存・従属する存在としてみなされていた。そこで、女性たちは同性同士の新たな「ペア」の関係、すなわち平等の関係に価値を見いだすようになる。

従って、女性たちにおける「真の」個人相互間の選択的な関係態は、男性との間ではなく、男性不在の、他の女性たちとの間でのみ志向さ

れていくことを意味する。女性間の友情の絆は、肯定的で、かつインテンシヴなものとなっていくのだ。

以上のコットの議論から、シスターフッドの特徴を3点挙げることができるだろう。シスターフッドの成立には女性の友情が基盤となっていること、シスターフッドの構成員は互いに「ペア」の、平等な関係に立つこと、そしてそれが成立するためには男性の不在が不可欠であり、男性不在は肯定的にとらえられていること、この3点である。

ドイツでも、多くの市民階級の女性が、公共圏でも親密圏でもない、ある種の社会的領域を創出することで、伝統的な手法を取らない新たな道を選んだ。すなわち、従来の男女の関係に依拠するのではなく、意図的にホモソーシャルな関係性、つまり同性(女性)同士の構成員による社会的関係を選択していったのである。ジョレスは、既に18世紀末から19世紀初頭のドイツにおいて中産階級の女性たちによって形成される、ホモソーシャルなある種の社会的領域が創出されたことを指摘している (Joeres [1995: 39])。ジョレスによれば、この社会的領域は、ハーバマスのように公-私的領域を厳密に分離するイデオロギーでは認識不能な、女性の欲望や新たなアイデンティティ形成の場となったのだという。

『女性新聞』の綱領が指摘しているように、1848年革命期当時、女性の権利や自立することを認識し始めた女性たちにとっては、「個人」という概念だけではなく「共同体」という概念も困難な障害であったといえる。なぜならば、個人であれ共同体であれ、これらの概念の構成員には、不問の前提として男性たちが想定されていたからである。しかし、例えば信徒運動の場となった教会、福祉・慈善活動、革命期に台

頭する女性協会、19世紀後半に設立が進む女子中等学校、そして女性労働組合などは、自己のアイデンティティを考え始めた女性たちにとって有益なものであったといえるだろう。

ドイツにおいて18世紀に広く普及していく「友情」は、共同体よりもさらに特定の、限定された概念であるが、コットの指摘にもあるように、選択不可能な家族とはちがひ、選択可能な連帯の一形態であった。そのため、友情は活動範囲が家庭に限定されていた女性たちの規範と欲望の間にある矛盾をいくぶんか解消する場として機能していた。そこでは、共通の経験や相互信頼によって、女性のホモソーシャルな関係性に重点が置かれていたのである。友人（たち）の選択、共通点を模索し選択すること。友情は、女性たちが自分自身や、自分と類似点を持つ他者のために、ある場所を創出する原動力を孕んでいるといえるだろう。確かに、選択可能な友情は、共通項を持たない者に対して排他的な共同体ではある。しかし、友情は、ジェンダーゆえに社会的に周縁化された女性たちがお互いを見いだし集団的に結束することによって、構成員の、あるいは集団の新たなアイデンティティを模索する場なのであり、また、友情自体は政治的とはいえないが、政治的機能を持ちうる場を提供する可能性を持つのだ。

以上のコットとジョレスのシスターフッド概念を下敷きにして、次節以降では、まず長編小説『城と工場』を、ついで『女性新聞』のドレスデン5月蜂起時（1849年）の記事を検討することで、オットーのシスターフッドについて考えていくことにする。

3. 長編小説『城と工場』

ではまず、『城と工場』において、女性同士

の友情がどのようにテーマ化されているのかに注目してみよう。

この物語は女子寄宿学校から始まる。貴族階級の令嬢ばかりが寄宿するこの学校で工場主の娘パウリーネは同級生からいじめられながらも、侯爵令嬢エリーザベトと友情を育んでいく。休暇になり、パウリーネが工場に隣接する館に戻ると、実はその土地はエリーザベトの住む城館と領地に面していた。二人は再会して友情の絆を強め、目の前の労働者問題を共有していく。二人の少女は、女子寄宿学校で同年代のクラスメート、寄宿生としての経験を共有し、友情を育む。そして故郷では再び隣に住む親友として絆を深めていく。

『城と工場』に登場する二人の少女の友情関係は、コットの指摘したシスターフッドの特徴である3点を網羅していることがわかる。まず、パウリーネとエリーザベトは、友情で結ばれることによって、精神的（女子学校の教育基盤）・政治的（労働者問題）・宗教的関心を共有し、一方が市民で一方が貴族という階級差をいともたやすく解消する。次に、この女性同士の友情は、お互いの中で他の一方を支配する伝統的な男性役割を引き受ける必要がないため対等に形成されている。最後に、両者の友情には、当然ヒエラルキー的な権力関係を持ち込む男性が介入していない。そのことによって、両者の友情は、男性的な支配-被支配のコントロールなしに「ペア」という特徴を維持する。ちなみに、革命後の1851年に出版されたオットーの小説『ブーヘンハイム』を分析したジョレス、クリスチーネ・オットーも、登場人物オイゲーニエとテークラという二人の女性の友情関係には、男性不在によりヒエラルキーが消失し、平等な関係がもたらされていると指摘している（Joeres [1998:277]、Otto [1997:151]）。

以上のように、オットーの小説において社会的制度や身分の差異は、友情の前に立ちどころ障壁としてではなく、むしろ友情によって変革しうる対象として捉えられていることが確認できた。また、オットーにとって女性同士の友情は、社会規範からの逸脱としての同性愛の対極に位置するものとして肯定的に捉えられている (Joeres [1998:272])。従って、ホモソーシャルな関係態として閉ざされた女性同士の友情は、常に支配-被支配関係にさらされる家父長主義的な社会構造の中であって、平等関係を維持することのできる場として肯定されるのである。

こうして、『城と工場』で見てきた二人の少女の友情関係と、従来のシスターフッド概念とは重なることが確認できた。しかし、二人の少女の友情は、平等を維持し続けることだけで完結しないように思われるのだ。今述べた、オットーが描いた友情を論じるクリスチーネ・オットーは、この小説の結末には全く触れていないのだが、第3部第10章「合一 (Vereinigung)」には次のような場面が存在する。主人公のパウリーネと労働者フランツは、工場労働者の反乱に巻き込まれた結果、反乱を鎮圧する軍隊の銃弾に倒れる。引用してみよう。

そこに号令が響き渡った。「撃て！」

[中略]「パウリーネ、撃たれた！」

「フランツ、あなたもなの？ ——銃弾がわたしの胸に突き刺さったわ、ああ、こうして私たちは一緒になるのね。天が私たちの一緒になった魂を共に——お呼びになっているわ。」

「パウリーネ！ これで君は“僕のもの”だ！」

彼らがしっかりと抱きしめあうと、二人の

血は一緒になって流れ出た。愛に満ちた熱い口づけをしながら、二人の魂は地上での短い戦いを終え、若き肉体から離れていった (Otto-Peters [1846→1996:318])。

このように、小説の結末では異性との——この場合は彼岸での——幸福な合一というモチーフが登場するのである。階級差の障壁によって予め結婚には到達不可能であるとの認識に立っている市民階級の娘パウリーネと労働者フランツは、暴動を鎮圧する軍隊の銃弾に倒れ、共に死ぬことで天上での一体化を達成する。その一方で、パウリーネと友情を結んだ侯爵令嬢エリーザベトは、侯爵ヤロミール・フォン・スツァリニーと結婚する。そして、『城と工場』は、エリーザベトとヤロミールによって死者たちの合一が祝福される場面で幕を閉じるのである。

「彼らは天国で愛で結ばれ、私たちは地上で結ばれたわ。これでよかったのかしら？」

「彼らの愛は天国でのみ到達しうる愛だったのだよ。このささやかで愛すべき地上で、僕らの愛で彼らの祝祭を祝うとしよう！」

そう言って愛し合う二人は、幸福に満たされて抱擁を交わすのだった (Otto-Peters [1846→1996:320])。

従って、二人の少女たちはホモソーシャルな友情関係を維持しながらも、そこで完結することなく、さらに、その延長上に幸福な異性との合一、それもハッピーエンドという終着点を見いだしていると言えないだろうか。

クリスチーネ・オットー、ジョレス、そしてコットの女性同士の平等を維持する「友情」の概念、そして女性同士の友情を基盤とするシスターフッドの概念では、ヒエラルキー的な権力関係を持ち込む男性が不在であることが決定的

な要因であったはずである。彼女たちの議論においては、女性同士の友情とシスターフッドの存立には、男性はどこまでも不在としてあることが要求されていたのである（強調は筆者による）。だがオットーは、以上のような異性との合一によるハッピーエンドを、いわば女性同士の友情やシスターフッドの最終目標地点として設定してしまっている。

ここに、従来のシスターフッド概念と、オットーが『城と工場』で想定したシスターフッドとのずれがあるのだ。

これはどういうことなのだろうか。しかも、従来のシスターフッドの概念から見れば「異性との幸福な合一」という過剰さは、『女性新聞』にみられるシスターフッドにおいても引き継がれているようである。次節では、『女性新聞』にどのようなシスターフッドの形成が見られるかを考察していくために、『城と工場』と酷似する短編小説『パウリーネ』も含む、『女性新聞』において一貫して取り上げられた「ドレスデン5月蜂起」の関連記事を提示してみよう。

4. 連鎖する「ドレスデン5月蜂起」関連記事

1849年に起こった「ドレスデン5月蜂起」とは、ザクセンでフリードリヒ・アウグスト二世と政府が、フランクフルト国民議会で採決されたドイツ帝国憲法の承認を拒否したため、5月3日から9日にかけて市民側が抗議し、武力をもって立ち上がったことをいう⁽³⁾。この蜂起に関する話は、『女性新聞』の5号（5月19日）にドレスデン蜂起のバリケード戦の様態を報じた記事「周辺の出来事」が掲載されたのを皮切りに、1850年12月の『女性新聞』休刊まで一貫して取り上げられるテーマの一つである⁽⁴⁾。

一連の経過を辿ると、5号の記事「周辺の出来事」が掲載され、続いて6号で手紙「戦死者へ」7号、12号でバリケード戦のヒロインを描いた短編小説『パウリーネ』と詩『ドレスデンのバリケードに立つ英雄的な少女』が掲載される。11号と14号では、プラウエンとドレスデンの女性たちの間で往復書簡が交わされ、22号では、「5月闘士」の墓荒らしに対するドレスデンからの怒りの手紙が掲載される。翌年にはいると、6号で5月蜂起で男手を失い苦境に陥った女性や子どもたちを支援する「救済が必要な家族への支援女性協会」の記事をはじめとして、「ドレスデン救援女性協会」関連の記事や手紙が年末まで断続的に掲載されていく⁽⁵⁾。

まず、ドレスデン蜂起を最初に報じた5号の記事「周辺の出来事」から見てみよう。

5号「周辺の出来事」

ドレスデンで5月3日から9日まで繰り返されたザクセン民衆の戦いには、多くの女性たち、それもあらゆる階層の女性たちが加わった。彼女たちはバリケードで加勢し、石や家具を引きずって来た。ある者は戦っている民衆に自分たちの食料を路上で提供し、またある者は負傷者の看護をした。やむを得ない場合には、銃弾の雨が降る路上のただ中で負傷者に包帯を巻いたり、彼らを家の中へ抱えながら運んだ。ひとりの若い処女がいた。彼女のフィアンセは体操の選手で⁽⁶⁾、戦いが始まった日に戦死した⁽⁷⁾。彼女はあるバリケードを3日間獅子のような勇敢さで守り抜き、彼女自身が敵の一発の銃弾に倒れるまで、彼女のピストルで多くの軍人を情け容赦なく撃ち殺した〔以下省略〕(FZ 1849/Nr.5)。

この5号の「周辺の出来事」の最後の三文が、

その後7号と12号で女性を中心に物語化されていく。それが7号の短編小説『パウリーネ』（作者 H. B. ハーバーラント）と12号の詩『ドレスデンのバリケードに立つ英雄的な少女』（作者 G. A. ヴォレンハウプト）である。7号の『パウリーネ』では、5号で報じられた「ある処女」が、ドレスデンの郊外で母親と二人暮らしの故陸軍少尉Fの娘パウリーネとして、そして彼女のフィアンセは、体操選手で美しい画家フランツとして描かれている。二人が結婚を明日に控えているところに、ドレスデン市民が蜂起し、バリケード戦が始まる。フランツ（との結婚）を案じたパウリーネは、彼の体操服を着て市内に行くが、彼女がバリケードに到着直後、彼は敵に撃たれて死んでしまう。彼の死を契機に彼女はわれを失い、復讐を込めて銃弾を放つと、どの弾丸も的に命中する。バリケードに突入する若い将校——パウリーネの兄と設定されている——を撃ち殺してフランツの仇をとるが、彼女もまた兵士たちの銃弾に倒れる。12号の詩は、さらに7号の短編小説を詩形式にアレンジしたものである。7号と12号の文学的な記事で描かれるバリケード戦の様子を引用してみよう。

7号 短編小説『パウリーネ』

——パウリーネが彼の名前を呼ぶと、フランツは敵の鉛の弾丸に当たってバリケードからまっさかさまに転落した。——彼女は愕然として叫び声をあげ、愛する人の亡骸をしっかりと抱きしめて、その冷たくなった唇に口づけた。——彼の名前を何度呼ぼうとも、フランツは、明日彼女の夫となるはずであったフランツは、死と結ばれたのだった。

すると絶望が彼女を襲い、彼女はわれを失った。——彼女は冷たくなった彼の亡骸から

銃砲を取り上げ、その銃に制御のきかない荒々しい喜びとともに弾丸をこめると、バリケードの上にひらりと飛び乗り、復讐をこめた弾丸を敵地へと送り込んだ。——彼女が放った弾丸は、どれも敵に命中した。人々は彼女の愛する人の遺体を離れた場所に運ぼうとしたが、彼女がそれを許さなかった。——パウリーネはフランツとともに埋めてもらうことを望んだ。

こうして彼女は戦い〔中略〕パウリーネによって、バリケードを守る人々は勇気づけられた。——彼女を阻止するものは誰もおらず、ひとびとはこの勇敢な女性に神聖な畏怖の念を感じたのだった。

〔中略〕日が暮れると〔中略〕兵士たちの攻撃は更に激しいものとなった。〔中略〕粗暴な笑みが彼女の口元に浮かび——彼女は銃の狙いを定め——引き金を引くと兄は、国王の雇われ者は、銃弾を受けて地に倒れ伏した。しかし兄とともにパウリーネも倒れた。兵士の放った3発の弾丸が、彼らの将校の敵を討ったのである。

警報を告げる鐘の音は虚ろになり、まるで吊いの鐘の音のように響き渡った。

兵士たちは撃退され、バリケード戦で戦った人々は葬送の歌を歌った。〔中略〕聖なる遺体を緑の小枝で編んだ花輪で飾り、彼女たちを永遠の眠りにつかせた。（FZ 1849/Nr.7より抜粋）

12号 詩『ドレスデンのバリケードに立つ英雄的な少女』

隣の男から彼女は武器をすばやくもぎとり、／引き金を引く、狙いがはずれる弾丸は一つもない。／あたかも天使が彼女のそばにいるかのごとく、／一発の銃弾も彼女に死を

与えることはできない。／それなのに神よ！
わたしは何を見ている？——旗は沈み、／彼女がよろめき——死に至らしめる鉛が命中したのか？／「さようなら」、そう彼女は叫ぶ、
「フィアンセが待っているわ、／わたしの切なる願いは遂げられた！——」

よく眠るがいい、少女よ、詩人がおまえに呼びかける、／おまえの名前に永遠の命を与えよう。／ドイツのために、わたしの祖国のために、おまえも死んでしまった、／おまえの墓からは生命が花開き、／おくれればせの太陽の軌道へと、／喜びの収穫へと国家が成熟すれば、／人々の心の中に、今おまえがなしたことは、／鮮やかな色彩の中で刻まれ続けるだろう。

(FZ 1849/Nr.14.より抜粋)

5号では、男女が死んだことは報じられているが、彼らがどのようなプロセスを経て死に、またその死が他の人々によってどのような死として受けとめられているのかは説明されていなかった。しかし、この2つの文学的な記事には、死についてそれぞれ異なった意味が加わっていく。また、女性は蜂起した市民を率いる象徴的な存在として7号で誇張して描かれ、12号ではさらにその誇張が増している。そして、5号の記事をもとにして、7号、12号ともに、『城と工場』と同様の、「異性の死による合一」のモチーフが加えられているのである。

1849年の6号、14号、22号には、ドレスデン蜂起に関する手紙が掲載されている。これらの手紙では、蜂起で殉じた「我々の兄弟たち」(FZ 1849/Nr.14.)、すなわち男性と規定される人々の墓と、そこに花を手向ける女性たちが共通のテーマとなっている。

6号のザクセンの女性たちと処女たちからドレスデン蜂起の死者に宛てた手紙「戦死者へ」では、「私たちドイツの女性は、月桂樹の枝を捧げるためにあなたがたの墓に行き、そして私たちがドイツの男性たちを讃え、尊敬していることを世に知らしめるのです。私たちのような人々が、あなたがたの気高い勇気と英雄的な死の証人となったのです」(FZ 1849/Nr.6.)と述べ、手紙の最後を「ドイツの処女たちは、あなたたちの墓をいつも新鮮な花で飾ることでしょう。」(FZ 1849/Nr.6.)という誓いの言葉で結んでいる。

14号のドレスデンの処女たちからの手紙では、「今となっては、私たちには、つまりあなた方の姉妹たちには、私たちの、そしてあなたたちの兄弟が眠る大きなお墓しか残っていないこの地で、花でお墓を飾ることが聖なる義務なのです。ザクセンの姉妹たちよ！ 私たちは、あなたがたと握手します！ 一体となって誓いましょう、このような時であっても、堂々と自由な民衆にふさわしくあり続けることを」(FZ 1849/Nr.14.)と、殉死者の墓のエピソードと共に、ザクセンの女性たちとの連帯を表明している。22号の手紙には、「ドレスデンの女性たちと処女たちが、あの5月事件で命を落とした民衆闘士たちが眠る偉大な墓を花と花冠で飾ることを、どれほど聖なる義務であると感じているかが〔中略〕報じられてきました」(FZ 1849/Nr.22.)とある。14号と22号に共通するのは、女性たちが墓に花を手向ける行為を「聖なる義務」であると述べていることである(8)。

そして、翌1850年の6号、30号、31号では、「救済が必要な家族への支援女性協会」(9)、その中でも特に「ドレスデン救援女性協会」に関する記事が掲載される。6号では、「“救済が必要な家族への支援女性協会”は、ドレスデン5月蜂起によって養い手、稼ぎ手が捕らえられた

り、逃亡せざるをえなくなったり、命を落としたりした家族の困窮の軽減を使命」としていることが報じられ、「現在のところ私たちの祖国で唯一、もっぱら貧困層だけに支援対象を限定する協会」(FZ 1850/Nr.6.)であることが強調されている。そして、「救援女性協会」の各地域での設立や、「ドレスデン救援女性協会」への加入・貢献が呼びかけられていく。しかし、その後の「ドレスデン救援女性協会」に関する記事では、集会在禁止されただけでなく、個人にまで監視の目が及び、強制的に家宅捜査が行われたり援助資金が一時押収されるなどして、援助活動が次第に難航していく状況が報告されている (FZ 1850/Nr.17.,20.,30.,31.)。

以上の5月蜂起関連記事からは、オットーの求めたシスターフードと呼べるようなものが形成されていくように見える。たとえば、11号と14号にみられるように、プラウエンからの手紙にドレスデンからの手紙が応答するという状況は、『女性新聞』を通じて各地の読者同士が5月蜂起を契機に「姉妹」と連呼し、後に残され生きている「私たち姉妹」の連帯感を共有しようことの現れであるといえるだろう。そしてまた、「女性救援協会」の設立の呼びかけや活動を報告する記事からは、革命闘士の家族、とりわけ女性に対する同情が女性たちの間に一体感を生みだし、協会組織という具体的な形をとって姉妹の苦しみを軽減・支援していこうとする様子がうかがえる。

しかしながら、このオットーのシスターフードらしきものの形成のプロセスは、従来のシスターフードの形成のプロセスとはやはり違うものであり、ずれを伴うものである。

そこで、次の節では、『城と工場』、ドレスデン5月蜂起時の記事と、従来のシスターフード概念とを対比しながら、オットーのシスターフ

ードについて論じていくことにしよう。

5. ドレスデン5月蜂起関連記事の過剰さ

従来のシスターフード概念と、5月蜂起関連記事からみえてくるであろう、オットーのシスターフードのあり方のずれとは何だろうか。このずれを明らかにしていくために、まず、ドレスデン5月蜂起を物語化した短編小説『パウリーネ』と詩『ドレスデンのバリケードに立つ英雄的な少女』に注目してみよう。この二つの文学的な記事には『城と工場』でオットーがシスターフードの延長上に位置づけた、「異性との合一というハッピーエンド」が引き継がれているように思われる。しかしながら、『城と工場』と二つの記事が持つこの「異性との合一というハッピーエンド」のモチーフの間にも、ずれがあるように思えるのだ。

『パウリーネ』では、正義のために戦って死んだ英雄フランツに代わってパウリーネが主体的に蜂起に参加すると、「彼女が放った銃弾は、どれも敵に命中し」、「パウリーネによってバリケードを守る人々は勇気づけられた」(FZ 1849/Nr.7.)。その姿は市民を率いて勇気を鼓舞し先導する象徴として、バリケードとともに戦う市民から英雄視されている。詩では、少女の神聖さと超越性がさらに誇張されている。

しかし更に、「彼女を阻止する者は誰もおらず、人々がこの勇敢な女性に神聖な畏怖の念を感じ」(FZ 1849/Nr.7.)、服従するのは、彼女が「フランツと共に埋めてもらうことを望んだ」(FZ 1849/Nr.7.)から、つまり生きながらにして既に主体的に死を選択してしまっているからである。詩でも同様に、「私の人生は終わった」、「フィアンセが呼んでいるわ、私の切なる願いは遂げられた！」(FZ 1849/Nr.12.)と言って、ヒ

ロインは主体的に死の選択をしている。

この二人のヒロインに共通するのは、英雄の死がヒロイン個人のフィアンセの死でもあることだ。婚姻を結ぶ相手を襲った死という悲劇性こそが、ヒロインに対して市民の向ける神聖な眼差しを強化する。市民女性のヒロインは、フィアンセの死によって家長制度的なパースペクティブから断ち切られ、結婚によって約束されていたはずの幸福や愛情（に溢れる家庭）を喪失し絶望するからこそ、愛と結婚を貫徹すべく、フィアンセの後を追って死を選択するのである。結婚に帰着する幸福と愛を死んでも絶対に志向しようとする男女の関係は、従来のジェンダー規範を極端に美化したものだともいえる。

このようにして、二つの文学的文章の重点は、市民蜂起を報じながらも社会的な事象から暴力に結びつくヒロインの個人的な復讐物語へ、死に結びつく愛憎の物語へとずれていく。ヒロインが生きながらにして主体的に死を選択することは、絶望の淵から再び約束されていたはずの未来の幸福を獲得し、愛する者と結ばれることと同義である。そのため、『パウリーネ』の結末では、人々が「フランツと共に埋めてもらう」という彼女の希望通り、二人の「聖なる遺体」を緑の小枝で編んだ花輪で飾って葬送する。この二人の葬儀は、まさに婚儀のヴィジョンとして二重の意味を帯び、詩の「さようなら、フィアンセが呼んでいるわ、私の切なる願いは遂げられた！」という少女の叫びは、死ぬことで初めてフィアンセとの幸福な合一という悲願が達成される瞬間を想像させる。

二人のヒロインは、どこにでもいるような市民層の娘として描かれている。もちろん、彼女たちが多くの軍人を情け容赦なく撃ち殺すことは、そもそも日常的な行為ではない。しかし、

フィアンセの死によって「絶望が彼女を襲い、彼女はわれを失う」(FZ 1849/Nr.7.) ことで、すなわち彼女たち自身が非日常的な状態と化すことで、暴力と死に対して日常的な意味を充填する必要はなくなる。それどころか死と暴力は、幸福や愛との親和性を持ってしまいうるものとして、そして幸福と愛を獲得するための困難な、しかし避けがたいプロセスとして、不可欠な要素になるのである⁽¹⁰⁾。

確かに、『城と工場』の「異性との合一というハッピーエンド」は、この二つの文学的文章に引き継がれている。『城と工場』でも、二人の男女は同じように工場労働者の反乱に巻き込まれて銃弾に倒れ、共に死ぬことで合一を達成した。それは確かに、「天国でのみ到達しうる愛」(Otto-Peters [1846→1996:320]) ではあったのだが、しかし、彼らは撃たれてしまい、同時に死ぬことができたので、女性は後にとり残されることはなかった(強調は著者による)。

後に取り残された女性たちが何をしてしまったのかは、二つの記事のヒロインたちを見れば明らかだ。彼女たちは、男性が先に死んでしまったことにより、「異性との合一というハッピーエンド」にさらなるずれを与えている。男性の死により彼女たちにとっての「異性との合一というハッピーエンド」は、死を最終的な到達目標にすることしかできない。また、生きながらにして主体的に死を選択すること、つまり自分自身を殺さなければならない。さらに、彼女たちは愛する男性を殺した敵(の兵士たち)、すなわち他者——それは男性たちでもある——を殺すという暴力をも引き受けたのである。この3つの点が、『城と工場』と二つの記事の決定的な違いであり、両者のモチーフである「異性との合一というハッピーエンド」の距離である。

このことを確認した上で、5月蜂起関連記事

についてみていこう。すべての5月蜂起関連記事に共通するのは、死の求心性、死による連帯である。蜂起直後の文学的記事のグロテスクさを帯びた「異性との合一」を志向する男女の死への共感、道義的崇高さを帯びながら、「我々の兄弟」(FZ 1949/Nr.14.)、すなわち男性の死者に対しての同情や畏敬の念へと受け継がれていく。その一方で女性たちは、民衆闘士の墓に花を手向ける「聖なる義務」を通じて、死者を共に神聖視する連帯へと結束していく。

しかし、時間の経過と共に、「死を連帯の基盤とするシスターフッド」の結束の軸は、「死者の畏敬」から、「生き残った女性の同情」へとずれていく。つまり、家族の成員が5月蜂起で死亡したり、逮捕されあとに残された女性たちに対する同情や連帯感へとシフトしていくのである。男性たちを死へと追いやったまま、「シスターフッド」の求心点が死から生へとずれること。このことを契機に、「シスターフッド」は、女性たち自身が貧困に苦しむ「姉妹」たちを支援するという「生の連帯」に変容し、「ドレスデン救援女性協会」という組織化された女性集団という具体的な姿をとって、援助活動を開始するのである。

他者の死を連帯の基盤とし、自らの生の結束を固めるシスターフッド。さらに限定して言うならば、「我々の兄弟」、すなわち男性同士のホモソーシャルな死を連帯の基盤とし、後に残され生きる者として自らを規定する、女性同士のホモソーシャルな生の連帯というグロテスクなシスターフッド。

従来のシスターフッド論においては、シスターフッドとは、男性不在によって平等を獲得する女性同士の友情を基盤にしたものであった。

しかし、ここにあるオットーのシスターフッドは友情を基盤とするものではない。そもそも

友情すら必要ではない。他者の死、男性(たち)の死だけを基盤として必要としたシスターフッドである。従来のシスターフッド概念の友情という要因が欠落し、男性不在という要因が極端に肥大化することによって成り立ちうるシスターフッドである。このシスターフッドは、誰かを殺してまでも、そして自分が死んでも一緒にいたいほど男性との合一を求め、そのために死や暴力までも回収してしまえる、そんな異性との「幸福」な合一を最終目標(共感の最終地点)として定めている。しかし、それと同時に、このシスターフッドを実際に可能なものとするために、男性を生きながらにして新たに(再)充てんすることなく男性(たち)を死に追いやった状態を維持し続けることで、絆を深めていくシスターフッドでもあるのだ。

ヒロインたちが死や暴力を経てまでも到達しようとする「死んで幸せになれて良かった」というグロテスクな異性との合一に、日常に身を置きつつ、生きながらにして共感するというねじれの中で、生き残った「われわれ姉妹」として生の結束を強化していくのである。

6. 結論

労働者階級をも「私たちの姉妹」としてとりこむ、オットーの超階級的なシスターフッド。しかし、『城と工場』と『女性新聞』のドレスデン5月蜂起時の記事から見えてきた彼女のシスターフッド像は、従来のシスターフッド概念を継承しつつも、男性たちの死をも回収する過剰さを孕んだものだった。

この過剰さとは一体何か。

コット、ジョレスの議論にあった、従来のシスターフッド概念では、女性同士の友情が基盤であり、そもそも男性の死という要因が基盤の

可能性として入ってこない。そうであるならば、オットーのシスターフッドは、5月蜂起という非日常の状況で男性たちの死に直面してもその基盤に彼らの死を取り込むことはなかったはずである。

逆に、このようにも問えるだろう。コット、ジョレスの想定するシスターフッドが仮に戦場下や蜂起というような非日常の状況におかれたら、結束となる基盤に死との親和性が兆すことはないのか。

ここから導き出せる可能性は2つある。

一つめは、ルイーゼ・オットー＝ペータースの想定したシスターフッドがその成立過程に男性の死をとり込む特異なものであり、その基盤は、女性同士の友情にではなく、男性の死に親和性を有するものであったという可能性。これは、想定されるシスターフッドが幾つもあり、オットーのシスターフッドとコットやジョレスのシスターフッドは全く別のものである場合である。そして、もう一つは、シスターフッド概念そのものが、男性の死という過剰なものにずれていく要因を持つという可能性である。オットーのシスターフッドにはその過剰さが見えるかたちで存在しており、一方のコットとジョレスのシスターフッドには、表面上見えない形で潜んでいるというものだ。

この二つの可能性があるが、ここでは後者であると考えたい。従来のシスターフッド概念が、その成立の要因として男性不在を肯定的に挙げていたことを過少評価せずに、この男性不在という要因が極限として男性（たち）のホモソーシャルな死という形を取った場合、そのときに成立するシスターフッドとは、まさに本論で見てきたルイーゼ・オットー＝ペータースのシスターフッドのケースに類似してしまう可能性を常に持ちうるのではないだろうか。

男性の死とは全く無関係に成立可能であるはずのシスターフッド。しかし、その成立要因として肯定的にとらえられてきた男性不在には再考の余地がある。ここから、シスターフッドに関わる新たな問いが開けてくるのではないだろうか。

註

(1) 新聞の構成としては、女性問題、協会設立、女性や子どもの教育などに関する多彩なテーマを主体としている。その他に「最近の出来事」という項目で報道記事、読者からの手紙、特に革命期に特徴的な、投獄された市民闘士からの獄中書簡(FZ 1850/Nr.1.,3.,5.)などが掲載される。ゲラに移るまでの1849年、1850年の『女性新聞』を総合的にみると、後半は手紙の掲載が中心になっていくのが特徴的である。

『女性新聞』の発行は週1回で、3ヶ月間の購読料が15ノイグロシエンであり、郵便局と書店で購読の申し込みができた。当時の民主派の新聞と比較すると、日刊の購読料が3ヶ月間で平均約1ターラー(30ノイグロシエン)、週1回から3回発行の新聞では、購読料にばらつきがあるものの、3ヶ月間の購読料が平均5グロシエンから7グロシエンであり、『女性新聞』の購読料は高めに設定されていることがわかる。ゲアハルトらも、『女性新聞』の女性読者層は、中産・上流階級に位置し、女性人口の約1割程度と結論づけており(Gerhard et al. 1979:28)、女性問題に関する記事の一翼を担う女性労働者たち自身が、『女性新聞』を調達して読むことはまず不可能だったといわざるを得ない。

編集者、及び執筆者に関しては、記事に執筆者の署名がないものも多く、署名があったとしても偽名の可能性は払拭できない。編集協力者は30名を越え、その中には後にオットーと結婚するアウ

グスト・ペータースや、1849年にマインツ女性協会「フマーニア」を設立し、亡命者や囚われた民主主義者の救援活動を精力的に行ったカティンカ・ツイッツも含まれ、また、7名以上の女性編集協力者が存在する（FZ 1850/Nr.52.）。

(2) ナンシー・コット、ルース＝エレン・ジョレスがシスターフッドの構成員の関係態に注目しているのに対して、ケイス・メルダーは、19世紀アメリカにおいて生じたシスターフッドを形成するネットワークと、形成される場所に注目し、6つのカテゴリーに分類している。まず、伝統的なシスターフッドとして、①家族構成員、②親しい女性の友人関係、そして新たなカテゴリーとして③女子学校、④宗教運動、⑤慈善団体、⑥職業団体を挙げている（Melder [1977:31]）。

(3) 革命側が立ち上がった時、国王軍は、主力がシュレースヴィヒ＝ホルシュタインに送られていたため、ドレスデンには2000の兵力しか残っていなかった。そのため国王は、5月3日、プロイセン軍の派遣を要請した。これを契機にドレスデンでは、バリケードの構築が始まった。翌朝国王はケーニヒシュタイン城に逃れ、ドレスデンでは臨時政府が作られたが、早くも翌5日にはプロイセン軍が到着し、本格的な戦闘が始まった。バリケード戦では蜂起した側の武装は不十分で、9日までに死者約250名、負傷者約400名を出して鎮圧された（成瀬他 [1996:322-338]）。その後、8月には蜂起に関わったとして取り調べの対象者、あるいは逃亡後に手配書の出された者は871人に上り、その一部はその後投獄された（村上 [1998:141-145]）。

(4) オットーは、1849年4月から『女性新聞』を発行している。1850年には結社法が、更にザクセンでは出版法が可決された。この法律は、定期刊行物の編集責任をザクセンに定住している男性のみに許可し、女性を定期刊行物の責任編集者とする新聞や雑誌の発行を禁止した。そのため、オット

ーは、『女性新聞』の発行地をマイセンからテューリンゲンのゲーラに移している。

この『女性新聞』をルース＝エスター・ガイガーとジークリッド・ヴァイゲルは政治フェミニズム的なジャーナリズムの起源として評価している。（Otto [1995:219]）。また、革命期の政治的な女性新聞としては、他に『義勇兵』（ルイーゼ・アストン編、ベルリン）、『社会改革』（ルイーゼ・デイトマー編、ライプツィヒ）、『女性新聞』（マティルダ・フランツィスカ・アネケ編、ケルン）があるが、『義勇兵』は1848年の年末に7号で廃刊し、他の2紙はいずれも1849年の上半期に創刊するものの、数号で刊行を終えている。出版の弾圧下で、オットーの『女性新聞』は他の女性新聞に比べ、極めて長期にわたって発行を継続しえたことがわかる。

(5) 『女性新聞』1850年12号では、ドレスデン蜂起のバリケード戦に参加したヴァイダ出身の女中パウリーネ・ヴァンダーリヒが第一番で終身刑を言い渡されたと伝えられたが、『治安警察通報誌』によると、彼女は、その後恩赦で6年間の労働刑に減刑されているという（田村雲供 [1998:11]）。

(6) 1830年代には、市民や民衆の自発的結合の場として「協会」が多数成立した。その中で、ナショナルな運動が「非政治的」協会の形を取って持続していくものとして、「男声合唱協会」と「体操協会」をあげることができる。「体操協会」は一緒に体操を行う団結した集団であるだけでなく、体操家たちは同じ制服を着用した。また、彼らにとって反動的なドイツの国王諸侯に対する反権威主義は、重要な原則であった。しかし1848年革命の挫折後、「体操協会」は革命に対する反動に加わっていく。「体操家」に関しては、（Mosse [1975=1994:135-144]）を参照のこと。ちなみに、男性の絆や連帯に着目する論者としてジョージ・L・モッセの他にイブ・セジウィックを挙げることで

- きる。しかし残念ながら両者は女性の連帯や「シスターフッド」に関しては、殆ど論じていない。
- (7) 武装した体操家集団が、ドレスデン蜂起に直接関わった可能性として、5月3日に市衛兵総司令官レンツが武器庫の保持と秩序確立のため、市衛兵とともに体操家武装集団を武器庫前へ向かわせていることや、蜂起殉死者のうち「知的職業者」として体操家、体操家教師が各1人記載されていること（『ドレスナー・ジャーナル』1849年5月21付）等が挙げられる。詳しくは、(村上1998:133-145)。
- (8) これらの手紙では、12号の詩の最終詩節の少女の死と同様に、「我々兄弟たち」の死が祖国のための自己犠牲的な死としてナショナリズム的な崇高さにまで昇華されている。また、12号の詩における彼女の墓、そして女性たちの手紙でくり返し述べられている男性たちの墓は、祖国ドイツのための「永遠の生命、不死、再生」を象徴する「無名戦士の墓」であり、「近代文化としてのナショナリズムを見事に表象する」(Anderson 1983=1997:32)

ものとして受けとめられている。

- (9) 「救援女性協会」の活動は、5月蜂起がごとくと鎮圧された後反動勢力が増すなかで、伝統的な慈善協会の活動をカモフラージュとして装った。そして、コンサートや食事会などの公の催しや、しばしば禁止された集会を通じて、5月革命闘士の家族に資金や現物を調達し、その政治目的を達成しようとした。中でも民主主義志向と政治性を最も鮮明に打ち出したのが「ドレスデン救援女性協会」である (Gerhart et al. [1979:21])。
- (10) 『パウリーネ』の、「銃に野蛮な喜びと共に (mit wilder Freude) 弾を込め、[中略] 復讐を込めた弾丸を敵地へと送り込んだ」、「野蛮な笑み (ein wildes Lächeln) が彼女の口元に浮かび、——銃の狙いを定め——引き金を引くと兄は、国王の雇われ者は、銃弾を受けて地に倒れ伏した」(FZ 1849/Nr.7) という文章に注目すると、ヒロインがフィアンセを殺害した敵を殺す時には、必ず彼女の非日常化を示唆する形容詞「野蛮な (wild)」が反復して用いられていることがわかる。

文献

- Adler, Hans 1980 *Soziale Romane im Vormärz : Eine literatursemiotische Studie*:123-183, München.
- Anderson, Benedict 1983 *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition=1997 白石さや・白石隆訳, 『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』NTT出版。
- Brinker-Gabler, Gisela, Ludwig, Karola, Wöffen, Angela 1986 *Lexikon deutschsprachiger Schriftstellerinnen 1800-1945*:231-234, dtv.
- Cott, Nancy F. 1977 *The Bonds of Womanhood : "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835*:160-196, Yale University Press.
- Frevert, Ute 1986 *Frauen-Geschichte : Zwischen Bürgerlicher Verbesserung und Neuer Weiblichkeit*, Frankfurt.=1990 若尾祐司・原田一美・姫岡とし子・山本秀行・坪郷實訳, 『ドイツ女性の社会史』, 晃洋社。
- Gerhard, Ute, Wischermann, Ulla 1988 "Liberalismus - Sozialismus - Feminismus. Zeitschriften der Frauenbewegung um die Jahrhundertwende", Brinker-Gabler, Gisela (eds.) *Deutsche Literatur von Frauen*, Bd.2: 268-284 C.H.Beck.
- Gerhard, Ute, Elisabeth, Hannover-Drück, Schmitter, Romina 1979 *"Dem Reich der Freiheit werb' ich Bürgerinnen" : Die*

Frauen-Zeitung von Louise Otto, Syndikat.

- Goetzinger, Germaine 1988 "Allein das Bewußsein dieses Befreienkönnen ist schon erhebend" Emanzipation und Politik in Publizistik und Roman des Vormärz" Brinker-Gabler, Gisela (eds.) *Deutsche Literatur von Frauen*. Bd.2: 86-104 C.H.Beck.
- Joeres, Ruth-Ellen Boetcher 1995 "»We are adjacent to human society« : German Women Writers, the Homosocial Experience, and a Challenge to the Public/Domestic Dichotomy", Clausen, Jeanette; Friedrichsmeyer, Sara (eds.) *Women in German Yearbook 10 (1994)*: 39-57 University of Nebraska Press.
- 1998 *Respectability and Deviance : Nineteenth-Century German Woman Writers and the Ambiguity of Representation*. The University of Chicago Press.
- Melder, Keith E. 1977 *Beginnings of Sisterhood : The American Woman's Rights Movement, 1800-1850*:30-48, Schocken Books.
- Mosse, George L. 1975 *The Nationalization of the Masses : Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich*, Howard Fertig=1994 佐藤卓己・佐藤八寿子訳, 『大衆の国民化——ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』, 柏書房。
- Mührmann, Renate 1977 *Die andere Frau : Emanzipationsansätze deutscher Schriftstellerinnen im Vorfeld der Achtundvierziger-Revolution*, Metzler.
- Otto, Christine 1995 *Valiationen des »poetischen Tendenzromans« : Das Erzählwerk von Louise Otto-Peters*, Centaurus-Verl.-Ges.
- 1997 "Emanzipation der Frau als literarische Innovation", Brandes, Helga; Kopp, Detlev (eds.) *Forum Vormärz Forschung Jahrbuch 1996: Autorinnen des Vormärz* :131-161 Aisthesis Verlag.
- Otto-Peters, Louise 1846 *Schloss und Fabrik*, Verlag von Adolph Wienbrack. →1996 Ludwig, Johanna, *Schloss und Fabrik : Roman von Louise Otto-Peters*, LKG.
- Sauter, Wilfried 1998 "Amazonen oder Spartanerinnen? Louise Ottos Verständnis von Frauenrollen in der demokratischen Bewegung und im bewaffneten Kampf der Revolution von 1848/49", *Was Frauen bewegte, was Frauen bewegt. Berichte vom 5. Louise-Otto-Peters-Tag 1997* : 30-43.
- 成瀬治・山田欣吾・木村靖二編 1996 『世界歴史大系・ドイツ史2』, 山川出版社。
- 田村雲供 1998 『近代ドイツ女性史 市民社会・女性・ナショナリズム』, 阿吽社。
- 村上俊介 1998 「ザクセンにおける一八四八／四九年革命と協会運動——一八四九年五月蜂起を中心に——」, 的場昭弘・高草木光一(ed.) 『一八四八年革命の射程』 : 113-152, 御茶の水書房。

※本論文は文部科学省科学研究費補助金(2001年度)の研究成果の一部である。

(すとう はるこ、千葉大学大学院、hsuto@mail7.alpha-net.ne.jp)

Sisterhood of Louise Otto-Peters

The excess of women's solidarity in the case of Dresdner May Revolution in 1849

SUTO, Haruko

Chiba University

hsuto@mail7.alpha-net.ne.jp

This paper touches on the issue of 'sisterhood' of Louise Otto-Peters (1819-1895), a leader in the German feminist movement and one of the first 19th century German women writers, and on her unprecedented attempt to unite women as 'our sisters' regardless of their social origins in the mid-19th century.

According to Nancy Cott and Ruth-Ellen Boetcher Joeres, sisterhood is based upon women's friendship, which gets the equality between women from male absence. Aiming at realization of such an idea, Otto's publications boosted up the coming into existence of a women's association taking over the traits of sisterhood, though, it contains a definitive gap and an excess; in her literary texts and news stories, especially about Dresdner May Revolution 1849, the union with the other sex is as an ultimate destination beyond Otto's sisterhood, for which this happy union must involve death and violence. Furthermore, it can be said that male homo-social death, namely 'our brothers' death' as a result of an extreme male absent form has a possibility of bringing the sisterhood into existence without friendship between women.

It has been considered that the sisterhood could be realized without male death. This male absence, which is regarded as a positive factor for the realization of sisterhood, however, is still to be reexamined.